

『INCHの楽しい仲間たち』 vol.8 その3

クリスマスとホグマニー (1)

佐伯 順弘 (岐阜県)

夏休み明けの9月。既に冬旅の計画は始動していた。初イギリス旅行のたった4ヶ月後、ロンドンのクリスマスとエジンバラでの年越しを楽しむ旅に行くのだ。9月5日には航空券を確定した。KLM オランダ空港約13万円のチケットである。その後、国内移動のLCCや宿、エジンバラホグマニーのチケットなどを次々と確保した。

ここでなぜこの年末にイギリスなのか説明しておかねばなるまい。(そうでもないか?でも、説明したい。)いくつかの単純な理由がある。前回のイギリス旅行ですっかりイギリスにかぶれてしまったこと、人通りが途絶えたロンドンのクリスマスの写真を見たこと、スコットランドにはホグマニーという年越し行事があると知ったこと、諸般の事情から日本に戻れないこと、昨年のクリスマスはあまりのさみしさに一人だけ、日本にいる人に電話をかけてしまったこと。これらの状況を総合的かつ合理的、さらに理性的に分析・考察した結果導き出されたのが今回のロンドンクリスマスとエジンバラホグマニー漫喫の旅約12日間である。

DAY-1 (22DEC) kaohsiung

休日出勤の土曜日。朝から行事、職員作業。この作業で一番大変な女性が一言の不平も言わずがんばっていたので、こちらがブーたれているわけにもいかず、その人のためにがんばった。その後の実のあるとは言い難い会議を耐え、勤務終了時刻を待つ。バイクをぶっとばし、帰宅。荷物チェック、洗濯、カメラデータ整理を終え、1810マンション出発。タクシーでMRT(地下鉄)中央公園駅へ。左営駅で停車駅も確認せず THSR(台湾高速鉄道:日本の新幹線を導入)に飛び乗る。年末でどこも混雑しており、時間的にかなり厳しい状況だった。空港ちかくの駅である桃園駅は列車によっては停車しないものもあるので、飛び乗った列車が桃園駅に停車しないものだったら、状況はさらに厳しくなっていたはずである。しかし、賭けには勝った。これは幸

先の良いスタートである。桃園駅から桃園国際空港まではエアポートバスで向かう。2110頃到着。両替で620GBPを手にする。



焦った割には、けっこう余裕があった。桃園国際空港には巨大なクリスマスツリーがあり、キリスト教徒でもないのに浮かれているのは(むしろ、キリスト教徒は浮かれていないと思うが)日本人だけではないと知り、少しだけほっとした。その後、チェックイン、イミグレーション通過。フライトは24:20だったので、空港でのんびり過ごす。この時間を楽しむために焦って空港に来るといっても愚かと言えば愚かだが、この時間が幸せなのだから仕方ない。旅のメモを書いたり、本を読んだり、到着してからの動きをシミュレートしたりして過ごした。

DAY1 (23DEC) taipei → london

・23DEC2012 TPE0020 → LHR1045
(1stop AMS Layover 3hr20min)
0027 搭乗、着席。三列シートの窓側。右側2人はフィリピン人の母娘だった。日本語を少し話すことができた。海外を旅すると母国語以外を話す外国人が本当に多いと感じる。しかも、それほどよく話せるわけではないのに、臆することなく話してくる。ここのあたりが、話せる言語を身につけられるかどうかの分かれ目なんだろうとデータもないのに静かに結論付ける。
0214 真夜中のディナー。ビーフ、ライス、パン、

バター、レモンムース、サラダ、赤ワイン。意外なほどうまい。10 時間後には朝食。うまい。

(アムステルダム時間に変更)

0645 台北を出発してから約 13 時間半後、オランダ、アムステルダムのスキポール国際空港 (AMS) に到着した。トランジットである。運動もせず、機内であれだけ食べておきながら、時間つぶしにパニーニとホットチョコを摂取。絶対に体に悪いはずだが、旅の最中はどうでもいい。そのために日常節制しているのだ。



(パニーニ。ほっとする優しい味だった。)



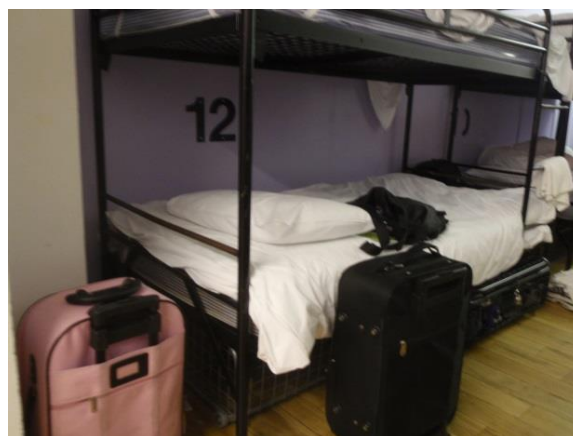
(スキポール空港は広い。深夜~早朝にも関わらず、人もかなりいる。全体的に照明は落とされ、落ち着いた雰囲気である。歩いていないと眠くなってくる。体内時計は徹夜したあとの午後である。)

0959 搭乗。約 3 時間のトランジットを経て、イギリス、ロンドンへ向かう。

(ロンドン時間に変更)



1100 約 1 時間のフライトでロンドンのヒースロー国際空港 (LHR) に到着。西に向かって飛んだので同日到着である。クリスマスツリーもなんかヨーロッパな感じ。イミグレーション通過。カフェでイギリスに到着したことを味わいつつ、メモをとり、これからの予定を立てる。街の中心部に向かい、今夜の宿にチェックインするだけだ。しかも 1 泊まっただけなのに既に定宿認定している The Generator である。問題はいかにガイドブックなどを見ないで、記憶を掘り起こしながらそこにたどり着くかである。ガイドブックや地図を見たら負けである。(誰にだ?) ロンドン生活者のようにオysterカード(地下鉄のプリペイドカード)を使い、記憶を辿りながら、あっさりと到着。まだ早い午後なのに、冬のロンドンらしい曇り空は薄暗く、なんだかとても落ち着く。途中、見覚えのある風景に自然と顔がゆるむ。久しぶり、オレのロンドン。(調子に乗りすぎな自分に気づいている冷静な自分もいるが、敢えて無視である。)



(12 番のベッド。近くにあるピンクのバッグは隣のベッド占有者の持ち物である。)

1520 身軽になって、市内探索へ。



まずは、F&C でしょ。ということで、専門店で早めの夕食。旅の最中は時間通りに食事をするのではなく、できるだけ少なめにしておいて、本当に食べたものを食べるようにしている。



そこかしこに、クリスマスディスプレイが。街中があたたかなキラキラにつつまれている。決して、目に痛いきらきらではないところがいい。街を彷徨っているだけで、幸せな気分になる。ま、旅に出ているときはいつも幸せな気分で行っているのだが。

DAY2 (24DEC)

0500 日中もずっと薄暗いため、なかなか体内時計が戻らないようだ。夜中に何度も起きるが、結局早起きしてしまった。出撃準備をして、レセプション前を通過しようと思ったら、クリスマスミールパッケージのポスターが目に入った。

eve dinner、Christmas lunch、Christmas dinner、boxing day dinner の4つがパッケージになって 40GBP。街のレストランに入るのも面倒くさいし、家族連れやカップルだらけなのは予想されたので、あっさり飛びついた。さて、これで今後の食事は確保された。が、しかし、まずは朝食だ。結局、気持ち悪いピエロの某バーガーショップ24

Hに入る。BFmealは、3.39GBPでそれなりの量と味。旅メモを書きつつ、今後執筆する小説の構想を練る。程無く飽きたので、ロンドンの名所めぐりに出かける。オイスターカードを活用し、地下鉄を楽しみつつ、トラファルガースクエア、ザ・マル、バッキンガム宮殿などをうろつく、どの場所にもクリスマスツリーなどのディスプレイが満載で雰囲気盛り上げている。早朝(まだ7時)であるためか、クリスマスイブであるためか、人がほとんどいなくて、なんだか広々としている。



ザ・マルを通り、テムズ川へ。



(あまりにもベタな観光写真。曇り空がいい。)

ロンドンアイという観覧車の近くにはロンドン水族館がある。朝から水族館。入った途端に驚かされた。足元はガラス張り、下には魚が泳いでいる。本当に進んでいいのか。割れないのか?前にいた小さな女の子と目が合い、ここは平気なふりをして踏み出した。その女の子も後から渡っていた。あっという間に、ロンドン水族館を気に入った。館内には直接エイなどに触ることのできるコーナーもあり、楽しめた。



こんな看板まであった。ふざけている。(笑)
Don't eat yellow snow!だと?なんでこんなこと書きたがるかなあ。おもしろいからいいけど。フランク・ザッパの曲にもあるけど、単純にそういう意味だ。水族館を出て、テムズ川に出ると天才ミュージシャンがいた。



ママに楽譜を持ってもらい、サクスを演奏する少年。カメラを出すとちゃんと視線を送ってくるところはプロだ。何人も人が集まって聞いていた。なかなかの演奏だった。

1210 観光の王道 48HRS big tour bus 29GBP



のんびりとロンドン観光である。乗り降り自由なので、とても便利。ボートにも乗れるということで当然乗ってみた。ナイトクルーズという趣で、なか

なかよい。こんな素晴らしいクリスマスイブの過ごし方があるだろうか。



1830 宿に戻り、eve dinner をいただく。サラダやデザートもついて、お得感満載である。

DAY 3 (25DEC)

0300 業務上の必要から日本に電話。宿の wifi 接続でネット電話なので格安。来年度の動きをなんとなく匂わされ、前途多難な人生を感じる。折角旅行に来ているのに、こういうのはなあと考えた。旅の途中だからこそ切り替えもしやすいと考え直し、また少し寝る。

0900 今回の大きなテーマの1つである。クリスマスのロンドンのゴーストタウン化の確認に出かける。昨夜からの雨である。地下鉄は入口が閉じられ、バーガーショップさえ閉まっている。なかなかのゴーストタウン状態だ。



こういう雨の日にしかもクリスマス日に家族もいない人間がうろろする例は希少である。

おもしろがってきてみたが、美しい風景をみられたものの、孤独感のカウンターパンチを受けたような感じだ。紙面も尽きた。次回はスコットランドの年越しの話である。

(つづく)